

# 鎌倉時代における村上源氏の公武婚

鈴木 芳 道

## 問題の所在

鎌倉時代の歴史像が武家一元論に替わり、朝廷・幕府・寺社の総合からの描写が主流となつて久しい。本稿で取り上げる公家と武家との婚姻、即ち公武婚も朝幕関係の中で生まれた歴史事象といえ、武家一元論史観では説明できない事象である。とはいえ、この問題は個別的・断片的に指摘される事はあつても、研究の主題とされる事はなかつた。この問題を初めて主題とした成果が近年の五味文彦氏の研究である。五味氏の研究は諸事例を一望に収め、その中から武家の推挙による公家の昇任の実態を明らかにした。私も五味氏に学びつつこの問題を主題に置き、公武婚が意味するもの、公武婚に結実した政治・社会の有り様を探ろうとした。本稿では先の拙稿で指摘した高い割合で検出される村上源氏の公武婚を取り上げ、その背景となるものを考えてみたい。

ところで、当該期における婚姻の要因に恋愛感情を求める事は認め得る所ではあるが、当事者本人の意志の外で決められる場合も少なくない。婚姻は当事者のみならず、姻戚関係として双方の親族に大きな影響を及ぼす。その点で婚姻は当事者、否、当事者以上に親族にとつては自身の問題として認識される所ではなからうか。その典型が外戚政治である。幼年同士は勿論、特に幼年の男子に母と見紛ふ程年長の女子が嫁したり、祖父に等しい年齢の男に嫁す幼女といった例は当時としては珍しくはない。こうした事例を年齢関係から現代的な常識論を以て疑問視す

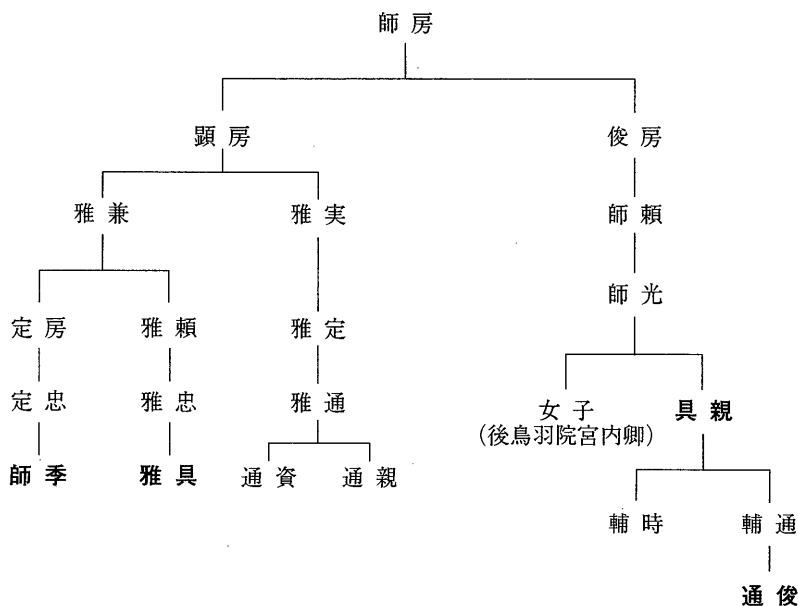
る事は危険といわざるを得ない程なのである。確かに親に勧められた婚儀を拒む例はある。源頼朝と北条政子との一女大姫は「可令嫁右武衛高能給之由、御台所内々雖有御計、敢無承諾、及如然之儀、可沉身於深淵之由被申」といい、また『明月記』嘉祿二年（一二二六）二月二十二日条は「自六波羅<sup>武士</sup>来、関東有執事云々、武州之女嫁<sup>（北条家）</sup>相州嫡男<sup>（伊賀）</sup>、依有愛妻<sup>（光宗）</sup>頗固辞、父母懇切勸之云々」と記し、同書文暦二年（一二三五）六月二十一日条は宇都宮頼綱女子小笠原旧妻が「其身雖固辞、父強勸令嫁千葉八郎<sup>（前時）</sup>」と記す。後二者は武家同士の婚姻で結局親の勧めを受諾するのだが、拒否の姿勢は強いものがあつた。右の事例は子は親の勧める婚儀を拒み得る社会環境であつたと同時に、親の論理、家の論理が当事者である子の意志を越えるものとなつていた事を示す。こうした婚姻は政略結婚であり、実現こそしなかつたが、一条高能と大姫との婚姻は、頼朝「妹」が高能の父一条能保に嫁して始まつた源家と一条家との姻戚関係をさらに重ねようとした政略結婚なのである。<sup>（5）</sup>

本稿は公武婚を、押し並べて言う事は危険であるが、政治性を否定できないものとして捉え、前稿に重複するが、まず村上源氏の公武婚の事例を個別に取り上げてその具体像を可能な限り追ひ、次に村上源氏の位置を政治史の展開の中に窺ひ、これによつてその立場が明らかにされた村上源氏の公武婚を政治史の中に位置付けてみたい。

## 第一章 村上源氏の公武婚

本章では村上源氏の公武婚を個別に検討したい。当事者や近親者の日記が残っていない厳しい史料状況の中で交流の実態を窺う事は至難といわざるを得ないが、可能な限り、その具体像を追求してゆきたい。

### ①綾小路師季—稻毛重成女子



村上源氏系図(一)

※『尊卑分脉』を基に作成。

綾小路師季は嫡家雅実の弟雅兼—定房流という傍流に生まれる。この婚姻は『吾妻鏡』元久二年（一二〇五）十一月三日条に「小沢左近将監信重相伴綾小路三位師季息女二歳、自京都参着、即以行光啓事由於尼御台所云々、是母儀者、稻毛三郎入道重成女、（北条政子、北条時政）遠州禅室御外孫也、去六月重成入道被誅之後、乳母夫信重雖扶持之号、猶恐彼余殃、隱居之处、尼御台所可有御哀愍之由内々被仰之間参向云々」とある事から知られる。稻毛重成の室は北条時政女子で、生母は牧の方である。牧の方は宮廷政治に関わった一族の出身とされ、牧の方所生の女子の多くが公家に嫁している。これは牧の方のネットワーク作りによるものとする見方が示されているが、何れにしろこの婚姻に牧の方の干与は可能性として有り得る所である。

重成は同年五月の従父兄畠山重忠が時政・牧の方夫妻の謀略により滅された政変に、親族の好で与同して誅殺され、その余波を恐れた師季女子の乳母父も隠居してしまった。尼御台所北条政子は師季女子

を不惑として鎌倉に呼び寄せた。翌日「綾小路姫君」は政子亭にて猶子に迎えられ、祖父<sup>⑧</sup>の遺領武蔵国小沢郷を安堵されたのである。

## ②土御門通行―綾小路師季女子（北条政子猶子）

土御門通行は嫡流源通親の子である。生母は承明門院在子の女房尾張局である。在子は法印能円旧妻高倉範兼女子範子が源通親に再嫁する前の所生で、後鳥羽院宮に入り皇子（土御門）を得、皇子即位時には通親の養女として源姓を名乗っている。通行は建仁二年（一二〇二）<sup>⑨</sup>の生まれ、建保六年（一二一八）時は一七歳であつた。

この婚姻は『吾妻鏡』建保六年二月四日条に「北条政子尼御台所御上洛、相州熊從、是為熊野山御斗敷也、以此次、令伴故稻毛三郎重成入道孫女<sup>年十六、綾小路三品師季卿女</sup>給、依可被嫁于土御門侍從通行朝臣也、<sup>同廿一日入洛云々</sup>」とある事から知られる。綾小路師季女子は前述のように元久二年（一二〇五）十一月三日鎌倉下着、翌四日には北条政子亭に入り政子の猶子に迎えられており、父からいえば公武婚とはいひ難いが、性格的には公武婚といひ得る。師季女子の生年を元久元年とすれば、彼女は建保六年時は一五歳という事になるが、何れにしろ一三、四年ぶりの帰洛であつた。この日の政子の上洛は嗣子のない將軍源実朝の後継問題を目的としたもので、師季女子の婚姻問題は必ずしも主目的ではないが、後述のようにふたつは全く別個の問題とはいえないように思われる。尚、通行と師季女子との間には通持があり、その子通尚は「住閑東」し、「小坪三位」と呼ばれた。<sup>⑩</sup>「小坪」とは鎌倉の東、旧鎌倉郡小坪村の内をいう。

## ③土御門定通―北条義時女子

土御門定通は源通親の四男で文治四年（一一八八）の生まれ、生母は高倉範子である。通親には範子との子である久我通光・定通・中院通方と前述の通行の他に花山院忠雅女子との間に一男通宗、平通盛又は教盛女子との間に

二男堀川通具を得ている。このうち通宗は建久九年（一一九八）に父に先立ち早世し、定通は前後関係は分らないが通宗の子になっている。室の北条義時女子は北条泰時・重時の妹、生母は重時と同じ比企朝宗女子で、承久三年（一二二一）の承久の乱で後鳥羽上皇に与同した京都守護大江親広の旧妻竹殿である。ふたりの間には承久二年に顕親が生まれている。定通三三歳の時である。この他に山門僧顕雲が義時女子所生と確認できる。親広の父で公文所・政所両別当の中原（大江）広元はかつて建仁二年（一二〇二）十月死去の通親とは政治問題を含めて昵懇であり、同年時一五歳であつた定通とも言葉を交わす機会も多であつたに違いない。私は後述のようにこの婚姻に尼御台所政子・執権義時の意向を想定するけれども、もうひとつ、親広の謀反に責を感じた広元が、竹殿の京都での再嫁先として通親との所縁から定通を挙げた事も考えられると思うのである。

両家の交流の具体的な様子は分らないが、藤原定家は『明月記』嘉禄二年（一二二六）六月十三日条に、辰時頃法服を着た道澄僧都が訪れ談じた事として「土<sup>定通</sup>里<sup>一条</sup>小<sup>路</sup>、<sup>武藏守</sup>室<sup>泰時</sup>、<sup>為父義村朝臣、毎年修八講、去年請顯尊・隆円・聖覚等証義者已下、今年円経已下</sup>八口云々」と記している。この日は貞応三年（一二二四）六月十三日に死去した義時の三年忌で、定通室はこのため法華八講を営んだという。これは前年も行われ、翌年以降も毎年行われるものという。この日鎌倉でも義時三年忌が営まれた<sup>①</sup>。また定通には「武士」的氣風が窺われる。『明月記』嘉禄三年四月七日条によると、定通は吉祥院前で魚を取ろうとした所、神人に制せられて「武士去比於件所漁、已無其制、依人被咎之、無其謂」と怒り、神人が去比觀漁を企てた「相模太郎」は急ぎ下船したと言え、定通はさらに「恢武士之威被輕歟、我又武士也」と言い放ったという。その二〇年後の宝治元年（一二四七）五月二十二日には、禁中最勝講結願に際して内裏陣中で鬪乱が起きている。事の起は定通子で義時女子所生の最勝講聽衆顯雲のための空車を引く定通家僕因幡守広盛が同講証義者興福寺権別当覺遍の参内の途次にこれを路傍で遮り、堀川に入れてしまったのである。『黄葉記』同日条は広盛について「土御門内府家僕、但実ハ其妻乳夫坎、仍為武士之号坎、故親広

法師旧仕欽」とする。広盛の行為は「武士」の威を嵩にかけたもので、広盛は定通室の乳父で、前は親広に仕えていたという。広盛の「広」字が親広の偏諱である可能性は否定できない。従って、定通室は単身ではなく、自身の乳父で旧夫の家人となっていた人物を連れて定通に嫁し、その家僕（家人）としたのである。そして「武士」の威を嵩にかける広盛の氣風が定通に「武士」的氣風を醸成させ、既に二〇年前の定通をして「我又武士也」と言わしめたと思われるのである。

仁治三年（一二四二）正月の皇位繼承問題では、幕府は九条道家が推す順徳皇子忠成王を退けて通宗女子通子が生んだ土御門第一皇子邦仁王を皇位に就けた。後嵯峨天皇である。かつて九条良経女子道家姉妹立子は順徳天皇中宮として承久の乱で廃された仲恭天皇（九条廢帝）を生んでいる。忠成王は立子所生ではないが、そうした背景を以て道家は忠成王を推したのだろう。後嵯峨踐祚を受けて道家側近平経高は、日記『平戸記』同年正月十七日条に「談世事、阿波院宮依武士縁、一定御出立之由、世以風聞、件縁者、前内府（定通）妻者泰時・重時等姉妹也、私差遣使者於關東、有慇之旨云々、彼公務世務者天下之至極歟、世以為慇云々」と憤り、同十九日条では道家が「如此事、關東計申之」とした上で「彼宮者祖母承明門院令扶持申給、故通方卿雖奉養育、事八變改之後、所令坐彼院給也、天下事出来之後、以可執權之意趣、前内府定通公、頻以発營、連々以飛脚示遣關東云々、加之御縁辺之輩、關東之有縁有数、随彼内府之妻者、泰時・重時朝臣等之姉妹也、就中重時者、有一腹之好」とし、さらに「前内府執權之世、今一重可衰微歟、何為之、所詮人世之運至極之故歟、悲哉々々」と憤慨している。後述のように後嵯峨天皇は通親一族の身内である。経高や道家によれば、当時巷間では後嵯峨天皇擁立にあたり定通は頻に飛脚を送ったといわれ、これには定通室は泰時・重時の姉妹である事が背景にあり、さらに重時とは「一腹之好」ありというのである。

右の経高や道家の言説は立場が立場だけに憶測という事もできるかもしれない。しかしそれが事実ではないとし

ても、公武婚のいわば効能のひとつが幕府の推挙に基づく栄達であり、その事が右の言説となつて現れたという事はできよう。

ところで、右の道家の言説の中に「一腹之好」という言葉がある。即ち同腹、同母に基づく縁であり、ここでは定通室と重時の関係である。京都にて公家に嫁した武家女子の日常を知る唯一の事例である藤原為家室宇都宮頼綱女子についてみると、彼女は在京中の母や母方の祖母牧の方と連れ立って旅行に出かける事もあり、為家は彼女にあつても至つて自由に生家と行来し、為家の兄弟で頼綱嫡男の泰綱も在京中はよく為家事を訪れ、姉妹の婿である為家に馬等を贈っている。泰綱と彼の姉妹との「一腹之好」は姉妹の婿である為家にまで拡大していつたのである。これと同じ様な交流が定通と六波羅北方として在京中の重時との間にもみられたとしても大過ないだろう。

#### ④唐橋通時―北条義時女子

唐橋通時は源通親の同母弟唐橋通資の子である。通資は多年兄と共に行動し、建仁二年（一二〇二）十月に死去した兄の後を承り程なく淳和・奨学両院別当に補され、通親の後継者の位置に立つが、元久二年（一二〇五）に死去した。通資の女子即ち通時の姉妹には後鳥羽院の一年年長の異母兄惟明親王に嫁した女子がいる。この婚姻は『明月記』嘉禄元年（一二二五）十一月十九日条の「実雅卿旧妻近日入洛、可嫁通時朝臣云々、義村（三浦）為知行庄之地頭、年来不被訴、心操為上郎由成感、有此婚姻之儀云々、竊案、義村八難六奇之謀略、不可思議者歟、若依思孫王儲王用外舅歟、近日被聴昇殿云々、老幸之時也、後聞、昇殿僻事云々」とある事から知られる。後述する所からみて通時五〇歳頃の婚姻である。ふたりには生年未詳の通清があり、弟通雄も同母の可能性はある。この北条義時女子は貞応三年（一二二四）閏七月に生母の義時後室伊賀氏が將軍に擁立しようとした伊賀氏女婿一条実雅の旧妻である。定家の聞いた所では通時知行の莊園の地頭が三浦義村となつており、これへの対策としてこの婚姻を結んだ

という。義村は北条泰時を女婿としており、前年に義時、この年の七月に政子を失った義時女子にとり泰時外舅義村の影響力は絶大であつたといえよう。定家は義村を謀略家とみなし、「孫王」を儲王とするため義村を利用するつもりなのかと疑念を抱いている。この「孫王」とは誰を指すのか。字義通り現天皇を基準にすれば年齢関係から該当者はいない。惟明親王の子交野宮がこれに当たるか。<sup>①</sup>定家はさらに通時に昇殿が許される事を聞き「老幸之時也」と感じ入つたが、昇殿は間違ひだつたといっている。

通時は安貞元年（一二二七）八月以前に高倉範茂室飛鳥井雅経女子が原因で解官、寛喜元年（一二二九）七月には蔵人頭を懇望している。「吾妻鏡」寛喜三年正月十四日条には「亥刻、大倉観音堂西辺下山入道家失火、依余燭唐橘中將亭并故左京兆旧宅、及二階堂大路両方人屋等焼失訖」とあり、通時は遅くともこの頃までには鎌倉大倉の故義時旧宅付近に居所を得ていた。同三年七月に「雖在関東、於其前途者不可依昇殿、當時不出仕人仙籍無要由」で「除籍」となつた。<sup>②</sup>通時は天福元年（一二三三）十一月に死去、これを伝え聞いた定家は『明月記』同年十

二月六日条に「聞左中將源通時、十一月廿三日於関東終命、

侯安嘉門院、女  
子俄退出云々

姉妹姫宮、春日局、今度除目可被補頭之由

告送、使不到着死去云々、運之拙非人力事歟、大臣孫、大納言三男也、五十余、為義時聲、而義村頻奉、遂不仮公卿之名、可悲事歟」と記した。蔵人頭任官の望みが叶えられないまま通時は遅くとも寛喜三年正月までに鎌倉に下向した。通時は不出仕を理由に除籍となり、天福元年十一月に鎌倉で死去、安嘉門院に仕えていた女子も退出した。ところがこの年の十二月に通時の蔵人頭任官が決まり、「姉妹姫宮」は鎌倉の通時に任官を知らせる音信を送つた。「姉妹姫宮」とは惟明親王王女だろう。また春日局は中院通方一男通氏の女子で、のちの後嵯峨院女房である。しかしこの音信の鎌倉到着を前に通時は命を落したのである。通時は大臣孫、大納言三男で、五〇余歳にして義時女婿となり、義村は通時の任官推挙を続けた。しかし通時は終に公卿に列する事はできなかった。傍流の悲哀が感じられる所であるが、他方で通時の義村に依存した姿も窺えよう。尚、通時には久我通光嫡子通忠に嫁し源氏長者と



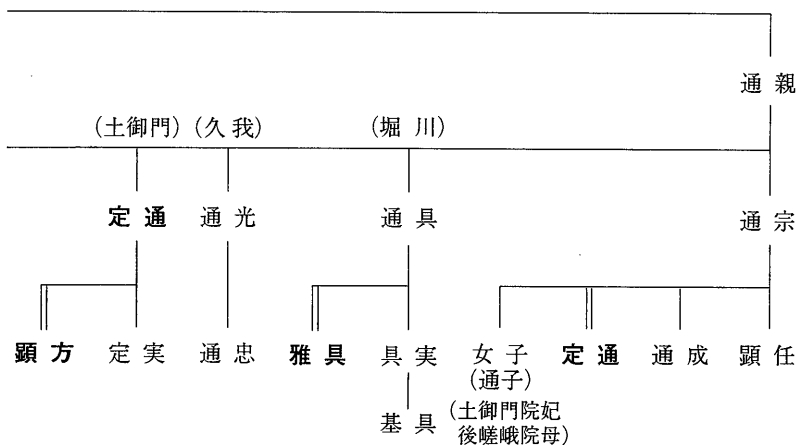
なる通基を得た女子がいる。また通時から五代目となる通春は「住閑東」<sup>(15)</sup>したという。

#### ⑤源具親―北条重時女子

源具親は最も早い段階で嫡流と分かれた俊房―師頼流に属す。この流は師頼の正二位大納言以降これを襲う者なく、公家としては下流に置かれる事となった。けれども源通親によつて和歌に導かれたといわれる後鳥羽上皇は建仁元年（一二〇一）七月に和歌所を設置し、具親は通親・堀川通具とともに一人の寄人のひとりとなった。具親が通具の子となつたとする徴証はないが、具親の父の名は師光、祖父は師頼と称し、具親という称はこの流としては異質の感がある。そして師光女子具親姉妹には後鳥羽院女房宮内卿がいる。また具親は、康永二年（一二〇七）二月の久我通光新大納言拝賀で中院通方と共に扈從を行い、承元元年（一二〇七）十一月二十一日の具親の催しによる承明門院在子のもとでの大般若経結願<sup>(16)</sup>を始めとして承明門院での村上源氏諸氏が集う行事・会合に参会する等、村上源氏の一員として、更にこれを通じての院近臣として宮廷活動を続けていた。

『明月記』承元元年三月二十八日条には「泰時<sup>(北条)</sup>出京、於小野宮<sup>(少将)</sup>少将門前訪妻室事、産後胞不下、度々絶入云々」とあつて既に妻室があつた事が知られる。だが重時は建久九年（一一九八）の生まれで承元元年時は一〇歳であるから、この妻室は前妻となる。従つて北条重時女子は父よりもかなりの年長者に嫁した事になる。

さて、具親と重時女子との間に生まれた輔通は嘉祿二年（一二二六）十一月の除目で侍従となつた。これについて『明月記』同年同月五日条は「除目、侍従源資道<sup>(通)</sup>、<sup>具親朝臣子、朝時同母弟、閑東拳状、申相国云々、</sup>」と記している。北条朝時同母弟、即ち重時が「閑東拳状」を「相国」西園寺公経へ上申したのである。また二男輔時について『明月記』天福元年（一二二三）十二月十六日条は「未時許望見聞書、侍従源資時、<sup>具親朝臣次男、朝時猶子、去夏成功申少将由入道語之、</sup>」と記し、輔時が朝時猶子となつてゐる事と去夏少将を望んだ事を書き添えてゐる。天福元年八月二十四日に具親は藤原定家を訪ねてゐる。『明月記』



村上源氏系図(二)

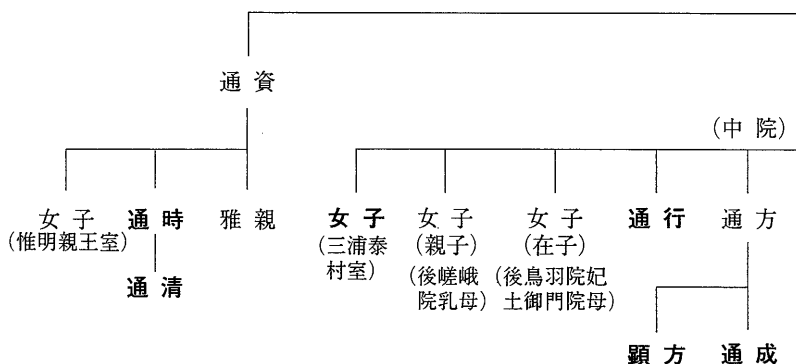
※『尊卑分脉』を基に作成。

同日条は「少将入道具親 来臨、扶病相謁、両息各光華之由今日委聞之」と記すが、その「光華」が北条氏との所縁に基づくものである事はいうまでもない。

ところで具親の外舅となった重時は、寛喜二年(一二三〇)三月から宝治元年(一二四七)七月にかけて六波羅北方の任に就いている。従ってこの婚姻はそれ以前の成立であった。そこで注目されるのが朝時の干与であるが、この点については後述に委ねたい。

京都における具親と重時の交流は、定家が訪問者からの言として『明月記』文暦二年(一二三五)二月十四日条に「具親入道以重時行向前黄門許、訴候者事柿本事不知由答、置歌帰云々」と記し、定家はこれについて「至極之僻人歟、駿州北條時義勅撰地頭殊異他歟」と述べている。具親が重時と共に「前黄門」亭へ行き、柿本人麻呂の事について知らないと答え、歌を置いて帰ってしまったといい、この事について定家は勅撰歌人らしからぬ事としている。不明な点もなくはないが、具親と重時の和歌を通じた交流が窺える所である。なお、朝時の猶子となった輔時からはその曾孫親輔が「住閑東」したという。

# ⑥源雅具—中原師員女子



源雅具は雅兼・雅頼流で、綾小路師季とは双従兄弟になる。従つて嫡流の通親流に対して傍流の位置にある。しかし雅具は源通親・二男堀川通具の子となつて雅具を名乗り、承久三年（一二二一）閏十月十日には、この年五月の承久の乱の後、みづから求めて罰を受けて土佐国遷幸となつた土御門上皇に供奉していった。

この婚姻は『明月記』文暦二年（一二三五）三月二十五日条に「金蓮云、前少将雅具近年為師員聳、得境無極、而此春入洛、其勢欲企南山斗藪、入精進屋之間、妻室終命、由飛脚来告、而如燐云々、宿運不依人力事歟、可悲、」とある事から知られる。土御門上皇は寛喜三年（一二三一）阿波国で死去、遺骨は京都に上つた。雅具も上皇の死を受けて帰洛し、その後鎌倉に下つたのであろう。中原師員は嘉禄元年（一二二五）十二月に設置された評定衆の筆頭となり、同年六月の大江広元死去後の文士の大物である。

さて、定家が聞いた所によると、雅具は近年中原師員の女婿となつてこの上なき境偶となつた。そして今春数百人を連れて上洛したが、妻室の産死を告げる飛脚が来たという。おそらく雅具は鎌倉入りした後に鎌倉にて師員女婿となつたのであろう。鎌倉では師員女婿として偶され、栄耀栄華を極めたに違いない。上洛の同道者数百人が事実かどうかはともかく権勢を誇示するかのような上洛の旅路

であつたであろう。ところが妻室産死の飛脚である。雅具は身重の妻を鎌倉に残しての上洛であつた。<sup>17</sup>定家のいう「宿運」とは雅具室の産死は無論、それにより師員との所縁を失う雅具自身の境遇をも指しているといえるだろう。

#### ⑦唐橋通時—北条実泰女子

この婚姻は北条氏研究会の「北条氏系図考証」<sup>18</sup>より知られる。北条義時の六男北条実泰は生年未詳であるが、唐橋通時の鎌倉在住が確認される寛喜三年（一二三一）時、実泰（實泰）同母兄政村は二九歳、実泰嫡子実時は八歳である。これから推すに同年時の実泰の年齢も二〇代半ばであろうし、実泰女子のそれも実時から大きくは離れはいないだろう。とすると実泰女子は四〇歳以上年長の男子に嫁した事になる。後述の通時子通清との混同ではないかと思われる程である。定家は寛喜元年七月の通時蔵人頭懇望につき「兄卿等之、連枝共職事器量歟」とするが、通時も学問を積んでいたであろう。とすると可能性のレベルにすぎないが、通時が幼少年期の実時に学問を講じていたとの想像も無理でない。

#### ⑧唐橋通清—北条実泰女子

唐橋通清は唐橋通時の子で北条義時女子を生母とする。この婚姻は「桓武平氏諸流系図」等により知られる。また同系図は「雅世・朝氏妻」となった北条実泰女子を載せている。<sup>19</sup>「雅世」は通清の本名であるが、当の通清かは未詳である。尚、通清曾孫通春は「住閑東」したといふ。<sup>20</sup>

#### ⑨中院通成—宇都宮頼綱女子

中院通成は中院通方の二男、生母は一条能保女子である。ふたりの間には貞永元年（一二三二）誕生の通頼があ

る。別の頼綱女子を母とする藤原為家嫡子二条為氏が後年上野国宇都宮に下向して編んだとされる『新和歌集』<sup>②</sup>には、通成の詠歌「八十まで久しくへたる年のをのなかきかひある春にあふらし」を収めている。この歌は「賀歌」に分類されている。通成が外舅宇都宮頼綱の八〇歳を賀したものでだろう。

#### ⑩土御門頭方—吉良長氏女子

土御門頭方は中院通方の子で通成の弟、生母は家女房である。また頭方は土御門定通の猶子<sup>②</sup>となっている。頭方は建長四年（一二五二）三月、後嵯峨上皇第二皇子で次期征夷大將軍の宗尊親王に従い鎌倉に下った。公卿として頭方が、殿上人として花山院長雅が供奉した。同行女房の中には通方女子一条局、源通親女子西御方があった。四月一日に鎌倉下着、翌月に宗尊親王は將軍となる。<sup>②</sup>頭方は宗尊親王が鎌倉を追われる文永三年（一二六六）七月まで彼に最も近侍した側近であった。吉良長氏は足利義氏の一男である。家女房を生母とする長氏は庶子の身であるが、足利氏は清和源氏義国流で、祖の義康は源頼朝母と同じく熱田大宮司藤原季範の女子を室に義兼を得、以後義兼・義氏・泰氏・頼氏と歴代の当主は北条氏当主の女子との婚姻を重ねた。両氏は北条氏当主女子所生の男子が足利氏当主となり、新足利氏当主はまた北条氏当主の女子を室に迎え、その所生の男子が次の足利氏当主となる関係が続けていた。將軍実朝の死以後、足利氏は清和源氏の嫡流に擬せられたが、常に北条氏当主を外戚とする事になり、足利氏はその活動に北条氏からの制約を受けていたと考えられる。

この婚姻の成立年や姻戚交流の具体像は明らかにしないが、その性格について次のように考える。藤原頼經以来政治の実権を持たない將軍周辺は北条氏当主への不満を持つ反得宗勢力の集う所となっていた。文永三年八月四日の宗尊親王の帰洛は、反得宗の急先鋒名越流北条教時による所謂鎌倉騒動が直接の因であったのである。私はこの幕府内の得宗勢力と將軍・反得宗勢力という対立関係と右の足利氏と北条氏の関係というふたつの問題を踏ま

え、庶子に置かれたとはいえ、足利義氏の一男である長氏を父とする女子が顕方に嫁すという事は、頼氏や長氏嫡子満氏が公家を番頭とする御所廂衆結番や御所昼番衆結番に名をみる事から將軍と直接結び得るとして、北条得宗勢力による足利氏を通じて將軍と反得宗勢力への抑止効果、または足利氏の反得宗化や顕方の長氏女子への私的感情等を想定するが、確証は持ちえない。尚、宗尊親王帰洛の供奉人に「土御門大納言、同子息中将顯方顯実、同少將」があり、顯実は正二位権中納言となる四条親俊またはその子で正二位中納言となる親頼の女子を生母としているから、長氏女子は嫡妻ではなかったと考えられる。

ところで顕方の事跡は境飯・鶴岡参社を始め、將軍出御における供奉と簾上げ等、宗尊親王の側近として將軍の儀礼に加わっている姿しか追えない。一方顕方は下向時の正四位下参議から、翌建長五年に從三位、同六年に權中納言、正嘉二年（一二五八）正三位を越えて從二位、文応元年正二位、同二年中納言、弘長二年（一二六二）權大納言、同三年十月二十六日に職を辞して前大納言となった。<sup>(25)</sup> こうした官位官職は將軍儀礼に反映する。建長五年八月十五日の鶴岡放生会の出御行列は、「先陣隨兵」に始まり「前驅」「殿上人」「公卿」「御車」「御釵役人」「御調度懸」「<sup>(26)</sup>御後」「後陣隨兵」の順であり、「土御門宰相中将顯方卿」が唯一の「公卿」として將軍の「御車」の直前に立っている。私的には宗尊親王の相談相手と思われるが、將軍儀礼の上では公卿・殿上人が將軍の最も近くに位置するのである。ここにおいて將軍に公卿・殿上人が奉仕するという構図が浮び上がる。摂家に清華家以下の公卿が奉仕する家礼に似たものがあるが、この事は將軍權威というものが天皇權威と無縁ではなく、むしろ天皇權威によって保証され得るものであった事を示すものといえるだろう。かつて唐橋通時は「雖在関東」不出仕を理由に除籍となった。しかしこれは顕方には当て嵌まらない。「雖在関東」という文言は、幕府に出仕する事は不出仕には当らない事を意味している。顕方の鎌倉入りは將軍と幕府への出仕を目的としたものである。<sup>(27)</sup> ところが通時のそれは任官の望みも叶えられずに武家姻族を頼としたもので、一種の無断欠勤、職場放棄というべきものである。こうした

所にも幕府の朝廷との関係性が示されているように思われる。

### ⑪源通俊―北条朝時女子

この婚姻は「系図纂要」に「小野宮通俊室」とある朝時女子を載せる事から知られる。小野宮通俊といえは有職家藤原氏小野宮家にも同名がみえるが、これは別人である。だが両家は無縁ではなく、藤原氏小野宮実資は寛仁三年（一〇一九）十二月に女子千古に小野宮邸を譲り、その後小野宮邸は千古の女子藤原祐家室からその孫女で村上源氏源師頼室、さらに師頼室所生師光と伝えられ、その子具親は「小野宮少将」と呼ばれている。また村上源氏源通俊は具親の孫で輔通の二男である。輔通もまた『黄葉記』宝治二年（一二四八）八月二十九日条で「小野宮三位輔通」と呼ばれている。輔通弟輔時は北条朝時猶子であり、そうした関係から、「小野通俊室」の通俊は源通俊である。

### ⑫唐橋通清―北条為時女子

この婚姻は北条氏研究会の研究成果により知られる。北条為時は北条実泰同母兄政村の嫡孫で、父時村に先立ち弘安九年（一二八六）に二三歳で死去した。ところが通清の生年を仮に通時死去の翌年天福二年（一二三四）としても為時死去時通清は五三歳で、為時女子を為時一五歳の子としても、その年齢は八歳という事になり、可能性は否定しないものの、現代的常識論では現実的でない。なお通清の曾孫通春は「住閑東」といい、この通時流は公卿に列する事はなかったが、鎌倉そして北条氏との所縁を続けたのであった。

### ⑬源通親女子―三浦泰村

この婚姻は、執権北条時頼とその外戚安達氏が謀った宝治合戦（宝治元年六月・一二四七）に敗れた三浦一族の妻子搜索を記す『吾妻鏡』宝治元年六月十四日条に「泰村後家者、鶴岡別当法印定親妹也、有二歳男子」とある事から知られる。定親は源通親の子で東寺僧、寛喜元年（一二二九）六月以来鶴岡八幡宮寺別当職にあった。この合戦で定親は「泰村縁座」による寵居となり、宝治元年七月に上洛した。<sup>30</sup>合戦で泰村を失った通親女子も落飾に処せられた。通親女子は通親の死去年（建仁二年・一二〇二）の生まれとしても、宝治元年時で四〇歳代後半であり、泰村は六四歳であったが、この婚姻の成立は「男子」の年齢から推して五年は遡らないであろう。仁治三年（一二四二）には村上源氏所縁の後嵯峨天皇が即位している。この婚姻の背景に後嵯峨天皇の即位を想定する事は許される所であろう。

## 第二章 後白河く後嵯峨院政期の政治動向と村上源氏

前章では村上源氏が結んだ公武婚を通覧した。始めに述べたように、本稿は公武婚の政治性を否定しない。そこで本章では、前章の諸事例を生んだ後白河く後嵯峨院政期を中心に村上源氏の政治的位置を概観しておきたい。

### 第一節 源通親の時代

村上源氏は、天慶末年から康保年間（九四六―九六七）に在位した村上天皇の皇子具平親王の子師房が臣籍に降り、源姓を賜わった事に始まる。初代師房は右大臣、二世代目の俊房は左大臣、顕房は右大臣となり、以降顕房流が嫡流となって雅実・雅定・雅通と、それぞれ太政大臣、左大臣、内大臣に昇った。この間は摂関期、院政期に当り、村上源氏諸氏が権力を掌握する事はなかった。



村上源氏が政界の中枢に位置するようになったのは、雅通の子通親の時である。この頃は、平氏政權から鎌倉幕府の成立と源頼朝の死という政界の転換期に当り、通親はこの局面を巧に乗り切って權力を握ったのである。通親の動向については橋本義彦氏<sup>①</sup>、目崎徳衛氏<sup>②</sup>の研究があり、また他の一族についても整理する所があり、本稿はこれらに多くを学んでゐる<sup>③</sup>。

久安五年（一一四九）に生まれた通親が政界の中枢に登る契機となったのが、後鳥羽院の乳母のひとり高倉範兼女子範子を室に迎えた事である。範子は平時忠・時子異父兄の法勝寺執行法印能円との間に承安元年（一一七一）に在子を得ていた。範子は能円が時子の子となった縁から、治承四年（一一八〇）誕生の第四皇子（尊成・後鳥羽）の乳母になったといわれ、皇子は寿永二年（一一八三）八月踐祚、在子は母の縁から後鳥羽後宮に入る。一方通親は高倉院近臣として名をみ、長寛二年（一一六四）年に花山院忠雅女子との間に一男通宗を得、嘉応元年（一一六九）四月に皇太后平滋子が建春門院の号を賜わり女院となると、内大臣雅通が別当、通親も殿上人に列し、承安元年に平教盛または通盛の女子との間に二男通具を得る。同年十二月に平清盛女子徳子が入内すると、通親は女御家の侍所別当に補された。

このように、平氏政權期、通親と範子は共に平氏の縁者として朝廷内に地位を得ていた。ところが、寿永二年七月の平氏西走に能円は同行したが、範子は叔父で父の跡を継いだ範季と共に皇子尊成王の養育に当たり、尊成王が踐祚する（後鳥羽天皇）と範季も後白河法皇近臣となった。範子が通親に再嫁したのもこの頃で、文治三年（一一八七）にふたりの間の初の子通光を得た。この婚姻により通親は後鳥羽天皇の乳父となった。乳父が天皇の後見として權力を振った例は少なくなく、これが通親の権力基盤となったとみられる。

通親は文治元年（一一八五）十二月の頼朝による朝廷人事への介入、即ち十人の議奏公卿の選定でその一員となつた。文治四年七月には淳和・奨学両院別当の宣下を受ける。またこの年に定通、翌年には通方と範子は年子三人

を生んだ。

建久初年、通親は頼朝より頼朝女子大姫入内の工作を依頼される。文治五年（一一八九）には後白河法皇の寵愛を受けた丹後局高階栄子所生の皇女の親王宣下（觀子内親王）があり、通親は内親王家の勅別当となり、さらに建久二年（一一九一）六月には内親王に宣陽門院の号が宣賜され、通親は院執事別当、通宗は別当、通具も判官代となった。さらに宣陽門院は法皇からの長講堂領を始め莫大な莊園を獲得した。この頃の通親は法皇の寵愛を得た丹後局・宣陽門院を権力基盤としていた。翌年三月に法皇は死去するが、旧院の勢力に揺ぎはなかった。四月の頼朝の征夷大將軍任官に際して通親は陣の儀の上卿を務めた。

建久六年三月、頼朝は東大寺落慶供養を名目に上洛し、十六日には宣陽門院に入り、のち六波羅に丹後局を招いて政子と大姫に対面させる。この年、在子は後鳥羽第一皇子（為仁・土御門）を生み、通親は権大納言となる。建久八年、後鳥羽第三皇子（守成・順徳）誕生、生母は範季女子重子（重子の生母は平教盛女子）である。建久九年正月、為仁王は踐祚、三月即位、土御門天皇である。土御門天皇は「桑門（僧侶）之外孫」という批判を受けたが、通親は在子を養女としており天皇の外戚となった。『三長記』は同年正月十一日条で「皇子諱為仁、今上第一宮、母儀尊勝寺養女、以後並相可擬外戚云々」と記す。さらに通親と通宗は後鳥羽上皇の院別当に列した。

ここに至るまでの間、通親の政敵であったのが頼朝と結んだ摂家九条兼実である。通親は院近臣として次第に対立するようになり、兼実が外戚の地位を狙って息女任子を入内させるに至って、大姫入内を狙う頼朝は兼実から離れ、建久七年十一月には中宮任子の内裏退出と兼実の関白罷免となった。翌年七月、大姫は二〇歳で死去した。兼実は通親について日記『玉葉』建久九年正月七日条に「彼卿来猶執国柄、（兼実）世称源博隆、又謂土御門、今仮外祖之号、独歩天下之体、」と記して憤りを隠さない。「博隆」とは関白の唐名だが、当の通親は権大納言であり、自身の大臣任官と頼朝嫡子頼家の近衛中将昇任を目指す事になる。建久十年正月十三日の頼朝死去を経て、同月二十日に頼家左中将昇任、

同年六月に通親は内大臣となる。

頼朝死後九日程過ぎると三左衛門の変が起こる。頼朝「妹」を室とした一条能保と高能父子の郎等である後藤基清等三人の左衛門尉が、父子の死後主家が冷遇されたために通親を排除しようとしたものといい、能保女婿西園寺公経、能保従兄弟持明院保家、能保の推挙で左馬頭に昇任した源隆保が出仕を停められた。この騒動は一条家旧臣や同家縁者に通親排除の動きがあったと考えられている。しかし幕府は通親を支持した。通親は幕府の機構整備に主要な役割を果たした中原（大江）広元と密月であり、この問題の結着では広元が中心となっていたと考えられている。

正治二年（一二〇〇）八月、範子没。建仁元年（一二〇一）七月、後鳥羽上皇は和歌所を設置した。一人の寄人の中に通親・通具・具親が入った。後鳥羽上皇の和歌は通親が導いたものという。翌年正月、在子は国母である事で女院に列し、承明門院と号す。同年十月、通親死去、五四歳であった。直ちに弟の通資が淳和・奨学両院別当となった。翌建仁三年、通資は後鳥羽上皇の院執事となる。通親の死後、後鳥羽上皇が政治を主導するようになり、反通親派（九条派）を登用して党派性を解消する。また宣陽門院も上皇が皇子雅成親王を同院猶子として送り込んだため実権を失った。

## 第二節 通親の子孫の時代

後鳥羽上皇は通親死後の村上源氏を排除する事をしなかった。元久二年（一二〇五）三月成立の勅撰集『新古今和歌集』の撰者筆頭は通具が務めた。

承元四年（一二一〇）十一月、後鳥羽上皇は土御門天皇に替えて守成親王を皇位につける。順徳天皇である。生母重子もまた父範季が後鳥羽上皇を養育していた関係から後宮に入っていた。そしてこの重子を養女としていたの

が範子の妹兼子即ち卿二位である。兼子も範子同様に後鳥羽上皇の乳母であつた。兼子はこうした關係を背景に専權を振うようになる。政治の実權から後退した村上源氏ではあるが、建暦元年（一二一一）九月、通方は藏人頭に補され、十二月には從三位となる。そして建保六年（一二一八）二月の尼御台所北条政子の上洛に至るのだが、この頃の朝幕關係は後鳥羽上皇と將軍源実朝との密月時代であり、上皇は実朝を通じて幕府に影響力を及ぼそうとしていた。建保七年三月、通光は内大臣となる。

承久二年（一二二〇）二月、土御門上皇第三皇子誕生（邦仁・後嵯峨）。生母は通宗女子通子である。そして通親女子親子が乳母となつた。

承久三年五月に始まつた承久の乱は、村上源氏諸氏にも大きな影響を及ぼした。彼等は討幕軍に加わり、六月六日の摩免戸合戦では御所中騒動となり、坊門忠信に定通・重子同母兄弟高倉範茂以下公卿侍臣は宇治・勢田・山田へ向かい、後鳥羽・土御門、そして乱直前に讓位した討幕に積極な順徳の三上皇と新天皇仲恭天皇は叡山御幸、通光はこれに供奉していた。さらに仲恭天皇は密々行幸し、これには具実が供奉していた。これに対して討幕計画に従わなかつた西園寺公経父子は「如囚人被召具之」という。乱後、順徳上皇の係累範茂は張本公卿六人のひとりとして相模国にて斬殺された。七月、通光は内大臣を辞す。またこの月、幕府は公卿一三人を恐懼に処し、内、村上源氏は範子所生の三兄弟通光・定通・通方、さらに通光の子通平と有力者が相次いで対象となつた。

閏十月十日、土御門上皇は乱の計画には参加せずとして免される所を、ひとり都に安堵する事を良しとせず、みずから望んで罰を受けて土佐配流となつた。定通は涙を流して見送り、通具の猶子雅具が供奉した。そして通子所生の皇子邦仁王は通方の養育を受ける事となつた。尚この年の五月には通資女子が嫁した惟明親王が五四歳で死去している。貞応元年（一二二二）には通方と一条能保女子との間に二男通成が生まれる。

承久の乱後、幕府を背景に西園寺公経は復権し、その女婿で次期將軍三寅（頼經）の父九条道家が朝廷の実權を

掌握した。仲恭天皇ののちの皇位は幕府が非後鳥羽流の観点から後鳥羽上皇の兄守貞親王に院政を執らせ（後高倉院）、その子孫（後堀河・四条）を立てる。後堀河天皇には道家女子蟬子が入り、その所生が四条天皇である。貞応二年五月、幕府は土御門上皇を土佐国から阿波国へ移す。嘉祿三年（一二二七）二月、幕府は阿波国守護小笠原長経等に命じて土御門上皇の御所を造営させる。同年九月、通具死去（五七歳）。寛喜三年（一二三一）十月十一日、土御門上皇死去（三七歳）、火葬され、天福元年（一二三三）十二月、承明門院在子は山城国金原に御堂を立て上皇の遺骨を移葬する。入洛は許されなかったという。供養法会には「前内府兄弟三人（通光・定通・通方）皆率息列座、外資雅卿（宇多源氏）一人相加」わっていた。嘉禎二年（一二三六）六月、定通内大臣昇任。寛仁元年（一二三八）十二月、通方死去（五〇歳）、邦仁王は承明門院在子の土御門殿に移る。鎌倉では寛喜元年（一二二九）六月に通親子定親が鶴岡八幡宮寺別当職に補任された。

仁治三年（一二四二）正月、後嗣のないまま四条天皇は没し、皇位継承問題が起きる。道家はかつて姉妹の立子の中宮となった順徳上皇の皇子忠成王を推し、西園寺公経も支持したが、順徳皇子を避けたい幕府は邦仁王を立てた。後嵯峨天皇である。天皇には通方の二人の女子（大納言局・高倉局）が女房として仕えた。同年十月十一日には金原御堂で「故土御門院御国忌」が営まれ、前右大臣西園寺実氏以下多くが参じた。前日十日より法華八講が営まれ、在子・定通は十日より参じている。またこの年には後嵯峨天皇第二皇子（宗尊）が生まれる（生母は平棟基女棟子）。

寛元元年（一二四三）六月、後嵯峨天皇第三皇子（久仁・後深草）誕生。生母は西園寺実氏女子大宮院姑子である。翌年十月十一日の故土御門上皇忌は、四条坊城で行われ、洛中で営む事ができるようになった。建長元年（一二四九）五月、後嵯峨天皇第四皇子（恒仁・亀山）誕生、後深草と同母である。寛元四年正月、後嵯峨天皇は久仁親王に讓位（後深草天皇）し、以後二六年余の院政を敷く事となる。院別当執事には定通の子顯定が就き、定通が

実権を握った。

今上御外戚は村上源氏から西園寺家に変わったが、中宮権大夫を通光の子雅忠が務め、雅忠女子後深草院二条は、弘長元年（一二六一）四歳で後深草院宮に入り、文永十年（一二七三）正月、一六歳で皇子を生んでいる（皇子は翌日死去）。寛元四年には実氏が三月に昇任した太政大臣の職を十二月九日で辞し、同月二十四日、替わって通光が異例の前内大臣から太政大臣に昇任している。宝治元年（一二四七）九月、定通死去（六〇歳）、翌年正月には通光が六二歳で死去した。

建長四年（一二五二）三月、宗尊親王が征夷大將軍となるために鎌倉に下向、通方子で定通猶子の顯方と通方女子一条局、通親女子西御方が供奉した。宗尊親王は文永元年（一二六四）に近衛兼経女子宰子との間に惟康を得る。村上源氏からは通具孫女具教女子が、永嘉門院端子と寺門僧で円満院に入った真覚を得ているが、端子の生年は文永九年（一二七二）で、宗尊親王帰洛七年後の年であった。鎌倉にて將軍惟康に仕えたのが定通嫡孫定実の「ゆかり」である「小町殿」であつた。

正元元年（一二五九）十一月、後嵯峨上皇は後深草天皇に替えて恒仁親王を皇位につける（龜山天皇）。通成は文永六年（一二六九）、内大臣、弘安七年（一二八四）十二月、六三歳にて死去した。その後村上源氏が天皇外戚となるのは弘安八年（一二八五）三月、後宇多天皇との間に通具の曾孫具守の女子基子が後二条を得、正安三年（一二三〇）に即位するまで待たねばならなかつた。

### 第三章 後鳥羽く後嵯峨院政期の政治動向と村上源氏の公武婚

本稿はこれまで、第一章で村上源氏が結んだ公武婚の事例を個別に窺い、第二章ではその時代の村上源氏の政治

的位置の変遷をみてきた。本章ではこの両者の関係性を考えてみたい。

通親の手腕によって朝廷における権勢の基盤を築いた村上源氏は、通親の死後の後鳥羽上皇の専制により通親時代の権勢は押さえられたが、後鳥羽―土御門―後嵯峨と重ねた天皇との所縁により、随所で政局の鍵となった。

建保六年（一一一八）時、皇位は順徳天皇であり、この頃の朝廷の実権は国母高倉重子の従姉妹で、重子を養女としていた卿二位高倉兼子が握っていた。この間の朝幕関係は、後鳥羽上皇と將軍源実朝との和歌を介した密月関係と、実朝の婚姻問題を始めとする兼子と北条政子との連携であり、表向きには対立関係にはなく、全体としても二〇年近く大きな戦乱もなかった。こうした中で浮上したのが後鳥羽上皇皇子の將軍擁立案であった。このため政子はこの年二月に熊野参詣を名目に上洛し、兼子と会談して兼子の養育する頼仁親王の下向の内諾を得た。政子の猶子で稲毛重成孫女綾小路師季女子と土御門通行との婚姻はその最中に結ばれたのである。

建保七年（一一一九）正月の將軍実朝右大臣任官拝賀鶴岡参社で実朝は殺害され、反発した後鳥羽上皇は幕府の正式な申し込みを拒絶し、代わって摂家九条道家の子三寅（頼経）が下向した。さらに翌年の承久の乱を控え、定通と義時女子との子頼親は承久二年（一二二〇）という、朝幕間の平和維持が限界に達しようというまさにその時に生まれているのである。

幕府にとり本来求められるべき新將軍は後鳥羽上皇の皇子であった。政子・義時が京都へ送り出した女子の嫁ぎ先は、後鳥羽上皇に所縁を持つその近臣村上源氏、しかも大江広元旧故の故通親の息男である。従つて私は、通行婚、定通婚、そして拒まれた親王將軍は一環したものと考えるのである。幕府はこの段階で院の内部情勢を把握して土御門上皇と村上源氏を好意的に捉え、このラインからの院政への働き掛けを狙っていたのではないだろうか。

承久の乱ののち、九条道家と西園寺公経は復権し、幕府を背景に朝廷における権勢を強めていった。一方北条義時・大江広元・北条政子と相次いで死去し、一条実雅旧妻北条義時女子が唐橋通時に嫁した嘉禄二年（一二二六）

十一月の頃の幕府は、義時嫡子泰時が執権、義時弟時房が連署の職にあつた。三浦義村はこの泰時を女婿としていた。この前年十二月には中原師員を筆頭とする評定衆が設置され、文士が占めた評定衆に唯一武士の立場から入ったのが泰村であつたのである。通時の父は通親の弟通資であり、淳和・奨学両院別当を始め、雅通・通親の嫡家の思恵は、通資止まりで通時には及ばなかつた。通時にすれば不本意だろうし、義村も昇任できるとみていたのではないか、さらに定家の目にも昇任がなさ過ぎると映つたのであろう。荘園絡みの通時と義村であるが、通時は義村の権力を頼み、義村は通時の栄達を通じて朝廷と繋を持つたのであろう。

嘉祿二年六月に侍従となる輔通を得た具親と北条重時女子との婚姻は遅くともこの数年前の成立だろう。この事例で留意されるのは重時同母兄の北条朝時の干与である。この段階での朝時は、定家の目にはその後六波羅北方として上洛する重時より有力者であり、同年正月の境飯沙汰は一日泰時、二日朝時、三日が義村であつた。朝時は「一腹の好」で重時に加勢したのであろうか。朝時は具親二男輔時を猶子とし、輔通子通俊を女婿とした。さらにこの他従三位八条実文の子で寺門派僧公朝を「為遠江守平遠時子住閑東」<sup>（附）</sup>まわせた事まで考えると、朝時は公家との結び付きに積極的であつたという他はない。しかし朝時流の名越家が反得宗となるのは泰時死後、朝時の子光時の頃からであり、朝時自身はそうではない。朝時の公家との所縁は泰時の承認のもと、北条氏の対朝廷政策の範囲内にあるといえよう。

雅具が中原師員の女婿となつた文暦二年（一二三五）以前は、貞永元年（一二三二）十二月に師員が筆頭となつてゐる評定衆の編纂になる御成敗式目が成立して間もない頃である。師員自身が当時「境無極」い権勢を誇つていたのである。

その御成敗式目第二五条「関東御家人以月卿雲客為婿君、依讓所領、公事足減少事」は、御家人の女子が公家に嫁すに際して、女子に所領を譲る事によつて幕府に奉仕すべき公事足が減少する事を問題視したものである。ここ



でも公家と御家人との婚姻が、御家人同士の間とは全く異なるものである事が理解されるが、この本文の中に「若寡權威不勤仕者、永可被辞退件所領歟」、即ち夫が高位高官である權威を嵩にかけて公事足を出さないならば所領は辞退すべきとしている箇所がある。公武婚の属性として夫の高位高官に基づく權威が挙げられているのである。

貞永元年に通頼を得た通成と宇都宮頼綱女子との婚姻は前年四月の土御門上皇の死去に前後する時期に結ばれたものであろうか。通成の父通方は暦仁元年（一二三八）の死去までのちの後嵯峨天皇を養育した人物であり、頼綱嫡子泰綱も泰時の偏諱を得、寛元元年（一二四三）から弘長元年（一二六一）まで評定衆に列する有力御家人であり、単に通成と頼綱との和歌の交流に留る様な問題ではないだろう。

ところで、承久の乱でみずから望んだ事とはいえ土御門上皇は配流となり、外戚の通親子孫達も恐懼したが、以後の朝幕関係において幕府は土御門上皇への配慮を欠かさず、上皇の名誉回復が図られていたようにも思われる。上皇の阿波国への移転と彼の地での御所造営がその証左である。承久の乱以後の村上源氏が結んだ公武婚は幕府中樞の要人の女子を室としたもので、この文脈の中で行われたとみるべきであらう。仁治三年（一二四二）正月の四条天皇死去を受けた皇位継承問題で幕府が土御門上皇皇子後嵯峨天皇を皇位に就けた事はその総仕上げだったのである。

順徳上皇皇子擁立を否定された道家は、寛元二年の西園寺公経の死去を待つて公経が執っていた関東申次の役務を独占し、同四年正月に後嵯峨天皇を四年で退位させて四歳の後深草天皇を立てて子の一条実経を摂政としたが、同年十月、新執権北条時頼は関東申次を公経子実氏とし、摂政も近衛兼経に替えた。これにより道家は失脚し、後嵯峨院政の時代を迎える事となる。

建長四年（一二五二）四月、後嵯峨上皇第二皇子宗尊親王が幕府征夷大將軍となり、側近には通方の子で、定通

猶子となっていた顯方が充てられた。また同行女房の内には通方女子一条局、通親女子西御方があり、宗尊親王が將軍職を解かれ京都に帰されるまで、將軍の周辺には村上源氏が近侍していたのである。また藤原頼経以来、將軍周辺は反得宗勢力の集う場となった。顯方と吉良長氏女子との婚姻はその間の事であった。

以上本章では、鎌倉時代後嵯峨院政期までの政治過程の中に村上源氏が結んだ公武婚を位置付けてみた。村上源氏の政治的位置は、一方で後鳥羽―土御門―後嵯峨と天皇との所縁を持ちつつ、他方で兼実―良経―道家の九条家との緊張関係を残しながら推移した。通親の時代に院近臣となり、兼実の反対勢力を形成した。党派性を解消した後鳥羽親政を経て道家―西園寺公経ラインが朝廷の実権を掌握する中、倒幕の謀議に加わらなかったにも関わらずみずから罰を受ける事を望み、配流後も幕府からの配慮を受けていた土御門上皇の皇子という皇位継承有資格者を抱えた村上源氏は、幕府によって順徳派の復権や九条家専横に対する抑止力として温められていた。後嵯峨天皇の即位は四条天皇の早世という偶然的所産を受けてのものにしろ、決して突発的なものではなく、幕府が年来温めていた朝廷政策といえるだろう。村上源氏が結んだ公武婚はその文脈の中で行われたのである。

### おわりに

本稿は鎌倉時代、特に後嵯峨院政期までにおいて高い割合でまとまってみられる村上源氏の公武婚を取り上げてその意味する所を、主に政治史に引き付けて考えてみた。婚姻は決して当事者のみの問題ではなく、親族全体に大きな影響をもたらす政治性を帯びたものである。その典型が外戚政治である。婚姻を契機とする所縁をどう使いこなすかは個人の資質の問題ではある。権力指向が強くて攻撃的な性格であれば実権を掌握し、政治の表舞台に立つ事もできる。温厚な人柄であれば、天皇の外戚になっても何もしいままで終わってしまう。だがそれもこれも所

縁という前提がなければ話にならない。しかし所縁は結ぶ事によって親族に様々な属性を与える。後白河院政から後嵯峨院政にかけての時代の村上源氏の政治的位置は、天皇および天皇家との所縁に規定されたものであった。

本稿はまず始めに婚姻事例を個別に検討した。厳しい史料状況下で何も述べられないような例でも取り上げる事は、史料無き故に軽視に流れる事を戒める事にもなる。村上源氏は北条氏・吉良（足利）氏・宇都宮氏・中原氏といった有力御家人との婚姻を重ねた事をみた。次に後白河く後嵯峨院政期の政治史を、村上源氏を軸に概観した。村上源氏の政治的位置は天皇家との所縁に規定されたものであった事を明らかにした。そして政治史の中に公武婚を位置付けてみた。承久の乱前の公武婚は、親王將軍擁立計画と期を一にしたもので、両者は一環したものと考えられる。承久の乱以降は、復権した九条道家―西園寺公経の親幕派が朝廷の実権を握る中、幕府中枢の要人が村上源氏と所縁を繋ぐ、それは後鳥羽上皇の討幕戦争に加担しなかった土御門上皇の名誉回復と歩調を合わせたかのようにも窺え、幕府が支持する道家―公経ラインの朝廷権力ではあるが、他方で村上源氏にはその暴走を抑止する役割もあったのではないかと思われるのである。後嵯峨天皇の即位と後嵯峨院政の確立、さらに親王將軍の擁立は土御門上皇の二〇年に及ぶ名誉回復の総仕上げといえよう。

後白河く後嵯峨院政期の政治史は、幕府―天皇家―九条家、この三者の権力闘争史であったともいえよう。さらにこの権力争いに天皇家との所縁を以て巻き込まれた村上源氏の権勢と苦難と忍従の歴史であったともいえよう。そうした村上源氏を支えたのが公武婚であったのである。

## 註

- (1) 五味文彦「縁に見る朝幕関係」、『明月記研究』五、二〇〇〇年。  
(2) 拙稿「鎌倉前期ふたつの公武婚」、『鷹陵史学』二九、二〇〇三年）、同「鎌倉時代の公武婚」、『鷹陵史学』三〇、二〇〇四年）。

- (3) 註(2)「鎌倉時代の公武婚」。
- (4) 『吾妻鏡』建久五年八月十八日条。
- (5) 頼朝は大姫の入内を目指していたので頼朝・政子がこの婚儀を勧めたというのは疑問を覚えるが、これは高能の側からもちかけたものである(註(4))。
- (6) 註(3)。
- (7) 杉橋隆夫「牧の方の出身と政治的位置」(上横手雅敬編『古代・中世の政治と文化』思文閣出版、一九九四年)。
- (8) 註(3)は「父の遺領」とあるが、訂正する。
- (9) 『尊卑分脉』註(3)では後述の理由でこの事例を取り上げる事を控えた。
- (10) 『尊卑分脉』。
- (11) 『吾妻鏡』嘉祿二年六月十三日条。
- (12) 『本朝皇胤紹運録』『群書類従』五、『尊卑分脉』。
- (13) 註(3)は将来的に通時に女子が生まれ、その女子を入内させて生まれる皇子を想定したが、訂正する。
- (14) 『明月記』寛喜三年七月三日条。
- (15) 『尊卑分脉』。
- (16) 『明月記』承元元年十一月二十一日条。
- (17) 註(3)は夫妻同道の上洛とするが、訂正する。
- (18) 北条氏研究会「北条氏系図考証」(安田元久編『吾妻鏡人名総覧』吉川弘文館、一九九八年)。
- (19) 註(18)。
- (20) 『尊卑分脉』。
- (21) 『群書類従』一〇。
- (22) 『尊卑分脉』。
- (23) 『吾妻鏡』建長四年三月〜五月条。花山院長雅は源通親前妻の父花山院忠雅の曾孫である(『尊卑分脉』)。
- (24) 『吾妻鏡』文永三年八月四日条。
- (25) 『公卿補任』。
- (26) 『吾妻鏡』建長五年八月十五日条。
- (27) 一四世紀後半成立の『増鏡』は宗尊親王の関東下向に従った公卿・殿上人・女房等の官位につき、後嵯峨上皇が「院中の奉公にひとしかるべし。かしこにさぶろうとも、限りあらん官、かうぶりなどはさはりあるまじ」と仰せられたとしている。その典拠は不明である。しかし依拠する史料なしの創作であるとしても、所謂関東祇候の公家衆の官位は右引用中に類する方針があつた事が考えられるのである。
- (28) 橋本義彦「小野宮家」(『国史大辞典』2、吉川弘文館、一九八〇年)。
- (29) 註(18)。
- (30) 『吾妻鏡』寛喜元年六月二十五日条。「鶴岡八幡宮寺社務職次第」『群書類従』四。
- (31) 橋本義彦「源通親」吉川弘文館、一九九二年。
- (32) 目崎徳衛「史伝後鳥羽院」吉川弘文館、二〇〇一年。
- (33) 第二章、第三章の記述は、主に註(31)(32)および『国史大辞典』(吉川弘文館)、通史的政治史の諸成果を基に村上源氏を軸に再構成したものであり、詳細な典拠は控える事とした。
- (34) 「とはすがたり」『新日本古典文学大系』50。